

02

目指すまちの姿

1. 都市空間コンセプト
「Well-Moving City SAPPORO」
2. 重点方針
3. 各エリアの目指す姿

第2章 目指すまちの姿

1.都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO」

第1章を踏まえ、20年先を見据えた札幌独自の都市空間コンセプトを設定します。誰もがイメージしやすい言葉で都市空間を表現し、札幌の都市空間に関わる人々の共通のビジョンとなるよう、大切に使い続けていきます。



Well-Moving City
SAPPORO

～いつでもどこでも誰もが心地よく、心も一緒に動くまち～

札幌の明瞭な四季を象徴する4色を用い、街の中を歩くことで心が弾み、毎日が少し楽しくなるような様子表現しました。曲がりくねった道は、思わず寄り道をしたくなる札幌のまち歩きの楽しさを表しています。全体のかたちは、「Well-Moving」の頭文字であるWとMをかたどり、人が歩き、出会い、都市の魅力を感じながら移動する姿を象徴しています。

春夏秋冬、地上も地下も、ここに住む市民はもちろん、
一時的な来訪者でも、いつでもどこでも誰もが心地よく、
心も一緒に動くまち、札幌。



「Well-Moving」という言葉は、身体的、精神的、社会的に良好な状態である「Well-being」に Walkable(歩きたくなる)、さらには移動、感動、心の動きを加えた「Moving」を掛け合わせた札幌独自の都市空間コンセプトです。

雪と共に生きる札幌だからこそ、地上も地下も、四季折々の風景のなかで、誰もが自然と「歩かざる」。その動きのなかに懐かしさや出会い、発見や共感が生まれる。暮らす人も訪れる人も、このまちで五感をひらき、歩くことが喜びになる。そんな札幌発の“心も一緒に動くまち”を目指します。

【イメージパースの解説】

- 春)・桜並木を眺めながら老夫婦が肩を並べて歩いている(景観×バリアフリー)
- ・歩道上の滞留空間で地域住民が井戸端会議をしている(道路空間の活用)
- 夏)・居心地の良い緑陰の下でオープンテラスを楽しんでいる(緑化×空間活用)
- ・道路等で様々なイベントが行われ偶然の出会いに溢れている(バスキング)
- 秋)・水辺空間や落葉など子どもたちが自然に触れながら遊んでいる(遊び場の確保)
- ・ひとりベンチに座り、紅葉や読書を楽しんでいる(多様な滞在空間の確保)
- 冬)・雪×灯りが織りなす景観を、来街者が楽しみながら歩いている(景観誘導)
- ・観光客が雪像の写真を撮ったり、自然の雪に触れて遊んでいる(観光×雪)

2.重点方針

都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO」を明確に推進するために、重要な要素を5つに分類し、行政だけでなく札幌の都市空間に携わる誰もが大切にするべき観点を重点方針として設定します。重点方針に基づく取り組みが相互に影響を与え合いながら各地域の魅力を高めていくことによって、“心も一緒に動くまち”を目指していきます。さらに、5つの重点方針について計測可能で明確な評価軸を設定し、ハード・ソフトを問わず施策効果の可視化や、関係者同士の合意形成などに活用することを目的として、評価手法を今後検討します。

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿



第3章

取組・手法



イメージ図:都市空間コンセプトと5つの重点方針(再掲)

第4章

推進体制・支援策

(1) 「歩くことが楽しく、健康に暮らせる」

「歩く」ことは、単なる移動手段に留まらず、歩行者にとって心身の健康を支える日常的な営みであり、まちの魅力を体感する行為でもあります。このため、歩道の整備や段差解消といった基本的なインフラ確保に加え、まちなかを歩くこと自体を「楽しさ」や「発見」につなげる要素、すなわち「歩かざる」仕掛けの導入が重要です。具体的には、アイレベル※²¹で視界を楽しませるアートや植栽、カフェのテラス席や商店街のにぎわいなどを通じて、歩行者の興味を引き出すことが求められます。

また、歩行による身体の活性化が生活習慣病予防にもつながることから、ベンチ等の休憩施設をまちなかに配置し、誰もが自身のペースに合わせて無理なく健康づくりができる環境を整えることも重要です。

さらに、現在市内各地で行われているウォーキングイベントや観光まち歩きなどのソフト事業と連携し、そこから得られるフィードバックをハード整備に活用することで、ハードとソフトが相互に作用し合い、地域の魅力を高める都市空間を形成していきます。



写真：シャンゼリゼ通りのテラス席(パリ)



写真：鉄道廃線跡地を活用した空間(パリ)

※²¹…アイレベル：道路空間だけでなく、沿道建物の低層部など歩行者の目線に入る部分のこと



歩くことが楽しく、
健康に暮らせる

(2) 「居心地が良く、自分らしくいられる居場所がある」

都市空間には「気軽にいられる場所」が必要です。誰もがパブリックスペースに対してにぎわいを求めているわけではない、ということ認識し、カフェや商業施設のようなサービス体験や消費活動を前提とした空間だけでなく、屋内・屋外問わず何かをしなくても居られる“余白”のある場として、ベンチで本を読む、子どもと過ごす、友人と語る、ひとりでぼんやりする、こうした多様な過ごし方を受け入れる居場所こそが、まちの居心地の質を高めます。札幌の都市空間の中で、誰にとっても自分らしくいられる居場所が点在していることは、市民の幸福感を高めるうえで欠かせない条件です。

さらに都市空間は「偶然の出会い」を生む重要な場でもあり、自宅と職場・学校以外に人同士が交流する場(サードプレイス)としての役割も大変重要です。

パブリックスペースで人々が様々な活動を共有して、顔の見える関係性を築いていくことのできる空間も併せて推進していくことで、多様なニーズを受け止める都市空間を形成していきます。



写真:車道から転換した広場空間(バルセロナ)



写真:誰もが自由に過ごせる空き地空間



(3) 「札幌らしく、四季を通じて歩かざる」

札幌の都市空間の特性の一つとして「季節の表情が豊か」であることが挙げられます。春の桜と梅が同時に咲く様、夏の澄んだ空気とみどり、秋の色彩、そして冬の雪景色、これらが日々の移動やまち歩きを彩る資源であり、都市の魅力でもあります。

しかしその一方で、特に冬季は寒さや積雪によって移動が困難になり、外出そのものが減少する傾向が見られます。したがって札幌の歩行空間には、四季を生かし、かつ乗り越えるための工夫が求められます。

例えば都心部では、地下ネットワークや沿道施設との連携などを通じて冬季も歩きやすい空間を創出することが重要です。また札幌市では毎年、市民・企業・行政など多様な主体によって約3万個のスノーキャンドルやアイスキャンドルが制作されていることがわかっています。冬季の景観向上や、制作作業を通じた交流機会の創出などの効果があることから、これまで引き継いできた冬の文化を大切に繋いでいくことが求められます。このように、雪を資源と捉えることで、雪が弱みではなく強みとなる都市空間を形成していきます。



写真:春のサイクリングロード



写真:札幌駅前通のイルミネーション



写真:市民が制作したスノーキャンドル



写真:秋の中島公園

札幌らしく、
四季を通じて
歩かざる



第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な
取組・手法

第4章

推進体制・支援策

(4) 「誰もが安心して、円滑に移動できる」

札幌市に暮らす人や訪れる人にとって、「安心して円滑に移動できること」は最も基本的で重要な要素です。例えば、国土交通省を中心に子どもの生活空間を守る「こどもまんなかまちづくり」が推進されており、札幌市においても、通学路を中心として、さらなる安全対策の強化が重要です。また歩行者だけでなく自転車通行空間の安全・安心を確保する必要性から、道路空間の再配分等により、これまで車道中心であった空間を歩行者や自転車中心の空間へ転換していくことや、過度に自動車に依存しないよう公共交通の利用を促すことが求められます。

誰もが安心して、円滑に移動できるまちづくりにおいては、高齢者、障がいのある方々、ベビーカーの利用者、観光客など、様々な方がストレスなく、安全で快適に移動できることが重要です。そのため、移動経路や建築物のバリアフリー化に加えて、わかりやすい案内サインの設置やスマートフォンを活用した情報発信、心のバリアフリーの推進など、官民連携によるユニバーサル※²²なまちづくりを進めていく必要があります。

ユニバーサルなまちづくりの推進にあたっては、文化・言語・国籍の違い、老若男女と言った差異や、障がい・能力を問わずに利用できるよう配慮された設計(デザイン)を指す「ユニバーサルデザイン」の考え方の積極的導入が不可欠です。

また、ハード・ソフトを問わず個々の事業推進に際しては、誰もが安全・安心に利用及び参加できるよう、事業計画の初期段階から積極的に当事者参画を進め、様々な利用ニーズ等を聴取しながら取り組みを進めていく必要があります。

こうした取組を通じて、札幌市が目指す「誰もが互いにその個性を尊重され能力を発揮できる、多様性と包摂性が強みとなる社会」を形成していきます。



写真:段差の無い横断歩道(バルセロナ)



写真:歩行者専用に変換した通学路(パリ)

※²²…ユニバーサル:第2次まちづくり戦略ビジョンにおけるまちづくりの重要概念の1つで、誰もが多様性を尊重し、互いに手を携え、心豊かにつながる。また、支える人と支えられる人という一方の関係性を超え、双方向に支え合うこと



誰もが安心して、
円滑に移動できる

(5) 「環境に優しく、みどりとともに暮らせる」

札幌の魅力である「みどり」は、良好な景観形成、生物の生息・生育の場の提供、健康・レクリエーション等の場の提供、延焼防止、地球温暖化防止など、環境面、地域振興面、防災・減災面において多様な機能を有しています※²³。

さらに、次の世代に魅力的な都市空間を引き継いでいくため、札幌市が目指す「ゼロカーボンシティ」の実現に向けて、「移動の脱炭素化」や「都市緑化の推進」「コンパクトな都市づくり」を進めていくことが重要です。また、2025年には改正道路法が施行され、第1条の2(基本理念)に「道路の脱炭素化の推進」が新たに盛り込まれました。国土交通省では、「道路分野の脱炭素化政策集」を公表しており、「低炭素な人流・物流への転換」を基本的な政策の柱と位置づけ、ハード整備と利用促進のためのソフト施策を両輪として、新たなモビリティ、公共交通、自転車、徒歩等の低炭素な移動手段への転換を促進し、国内のCO₂排出量の約18%を占める道路分野※²⁴について、中期目標として、2030年度において、温室効果ガスを2013年度から46%削減することを目指しています。

札幌市においても、公共交通の利用促進や、道路空間の再配分等による自転車通行空間の確保等により、自家用車に過度に依存しないまちづくりへの転換を図ることが求められます。さらに交通面の対策のみならず、コンパクトな都市づくりによる「歩いて暮らせるまち」を推進することが重要です。

こうした取組を通じて、人々が多様な機能を有する「みどり」を身近に感じながら暮らすことができる、持続可能な都市空間を形成していきます。



写真:道路空間の緑化(バルセロナ)



写真:エッフェル塔付近の緑化(パリ)



写真:自転車の利用促進(道路分野の脱炭素化政策集より)

※²³…出典:札幌市「都心のみどりづくり方針」より

※²⁴…道路分野:道路利用約15.9%、道路整備約1.3%、道路管理約0.5%の合計

環境に優しく、
みどりとともに暮らせる



3.各エリアの目指す姿

「Well-Moving City SAPPORO」の実現を目指し、特性の異なる「都心」「地域交流拠点」「住宅市街地」の3つのエリアそれぞれについて、目指す姿を設定します。

ただし、各エリアにおける目指す姿は画一的なものではありません。季節や時間帯、そして人それぞれの違いに応じて変化する人々の活動に焦点を当て、具体的な複数のシーン(風景)を描き出します。これら多様なシーンの集合体こそが、本ビジョンが示す目指す姿となります。

(1) 都心の目指す姿

都心における目指す姿を設定するにあたり、「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、都心エリアが果たす役割を整理します。

都心
JR札幌駅北口一帯、大通と東8丁目・篠路通の交差点付近、中島公園の北端付近、大通公園の西端付近を頂点として結ぶエリア
地域交流拠点
主要な交通結節点周辺や区役所周辺等の生活圏域の拠点となるエリア(全17箇所)
住宅市街地
市街化区域内において、工業地及び流通業務地を除くエリア(複合型高度利用市街地、一般住宅地、郊外住宅地)

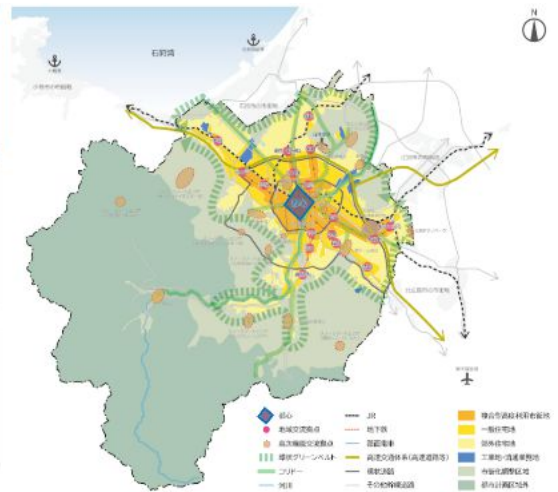


図:「第3次都市計画マスタープラン」における分類(都心)

① 「都心」が果たす役割

都心は札幌の「顔」であり、都市のアイデンティティと国際競争力を象徴する中枢的空間です。「Well-Moving City SAPPORO」においては、都心エリアが、歩いて魅力を実感できる最先端の象徴空間として機能することが期待されます。ビジネスや観光といった多様な都市機能が凝縮され、同時にそれらを「歩くことで体験できる空間」に転換していく必要があります。

たとえば、札幌駅前通や大通公園など、特に札幌を象徴するパブリックスペースにおいては、時代に合わせた更なる魅力向上を図ることが求められます。また、四季を通じて快適に移動できる地上・地下の重層的な歩行ネットワークの充実による回遊性の向上や、中通りに着目した新たな魅力づくりも、都心部における重要な役割です。

札幌市民だけでなく、多様な来訪者にとって特別な体験ができる都市空間の形成を進めることで、都心はより魅力的な象徴空間となり、世界に向けた「札幌らしさ」を発信する基盤になっていきます。

巡るたび、また巡りたくなる。
好奇心の積もる街並み。



この街は、いつ訪ねても、何度訪ねても面白い。
気持ちの良い風を感じて歩いても、
ぬくもりを求めて深く潜っても、
そこには必ず、思いがけない出会いがある。

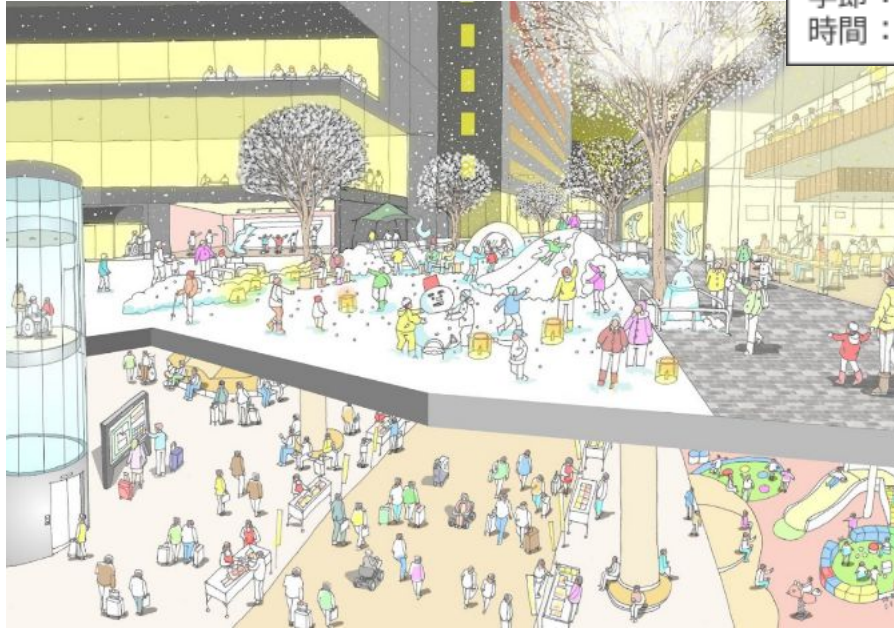
【イメージパースの解説】※初夏／昼間(休日)

- ・ストリートと一体となった沿道空間では、オープンカフェや広場活用など、新たな出会いの場にもなっている
- ・交通環境が整備され、荷捌きや人々の乗降など、都市活動が円滑に行われ、誰もがストレスなく過ごしている
- ・沿道施設における低層部のにぎわいが歩いて楽しい街路空間の一部となっている
- ・都心を訪れる買い物客、学生、高齢者、ビジネスパーソン、家族連れ、観光客、障がいのある方など、誰もがそれぞれの好奇心を持ち回遊したくなるような魅力的なストリートが形成されている
- ・休憩施設が充実しており、誰でも気軽に休み、交流することができる

③ 地上と地下を最大限に活用して季節を楽しんでいる風景

この街の冬にはいろいろな色がある。

季節：冬
時間：夜間(休日)



青空の下、ピリッと冷えた空気を吸い込み、季節を感じて歩くとき、常緑の温もり溢れる空間で、無為な時間を過ごすとき、どんなときでも、老若男女、人それぞれに、思い思いに、どこかに居場所を見つけられる。四季を通じて楽しめる街並み。

④ 魅力的な沿道・歩道空間で誰もが日常を楽しんでいる風景

季節：秋
時間：夕方(平日)



道と街の境界線を、みどりとゆとりが緩やかに繋ぐ。道行く人も、働く人も、くつろぐ人も、もてなす人も、みんながそこで自然に交わり積み重なったにぎわいが、心地の良い喧噪を生む。視線を向けた光景すべてが、切り取りたくなる、ユニークで楽しい街並み。

(2) 地域交流拠点の目指す姿

地域交流拠点における目指す姿を設定するにあたり、「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、地域交流拠点エリアが果たす役割を整理します。



図：「第3次都市計画マスタープラン」における分類(地域交流拠点)

① 「地域交流拠点」が果たす役割

地域交流拠点は、市内の各生活圏域を支える地域のハブ的な役割が求められます。「Well-Moving City SAPPORO」においては地下鉄駅やバスターミナル、区役所など多様な機能が集積するこのエリアが豊かな生活環境を支える拠点として機能する必要があります。

特に「第2次札幌市立地適正化計画」においては、地域交流拠点など都市の拠点となるエリアに都市機能誘導区域を定め、誘導施設の集積に向けた各種誘導施策を講じることとしており、誘導効果を相乗的に高めるためにも、周辺道路や広場等のパブリックスペースにおいて、人々の交流が誘発される仕掛けや回遊性を向上させる取組を推進することが重要です。

都心のような高度機能の集積ではなく、特に「日常に根差したにぎわい」に着目し、市民の愛着と地域力を支える「人々の顔の見える地域拠点」としての役割を担います。

② 「地域交流拠点」の目指す姿

行きも帰りも寄り道せずにはられない。
にぎわい、出会いのターミナル。



近頃移動がスムーズで、行きも帰りも余裕が出来た。
空いた時間で、寄り道しよう。
今日はどんな魅力溢れるヒト・モノ・コトに出会えるだろうと、
笑みがこぼれた。

【イメージパースの解説】※夏／昼間(休日)

- ・いつもの駅前広場で、いつも何かやっている。偶然の出会いと人々の笑顔が生まれる仕掛け(テラス、広場活用)
- ・プレイス機能に特化したストリートでは、滞留できるベンチや植栽、アートなど、居心地がよく楽しめる施設が整備されている
- ・エリアマネジメント団体等による、地域に密着したイベントが行われている
- ・誰もが移動しやすいターミナルとして、バリアフリー化や最適な動線が組まれている

③ 快適に移動ができ、待ち時間さえも楽しんでいる風景



毎日の通勤、通学、買い物も、出張、観光、初めてとなる訪問も、あらゆる流れが整えられて、快適に移動ができる過ごしやすい街。乗り換えで空いた時間や、待ち時間さえ楽しめる、様々な街の仕掛けが、市全体の魅力をつなげ、高めるための要となる。

④ 自然と歩みが遅くなり、思わず寄り道をしてしまう風景



この街を訪れたなら、寄り道せずにはられない。道路まで溢れ出す街の魅力に、自然と歩みが遅くなる。食事や買物、面白そうなイベントも、少し歩けばみどりを楽しむことさえ出来る。今日はどこに寄り道しよう。日々の移動に彩りを加える、地域の交流拠点。

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な
取組・手法

第4章

推進体制・支援策

⑤ 屋内外を行き来しながら冬を満喫している風景



冬はどうしても、屋内に籠もりがちになるもの。
それならば、籠もれる場所にバリエーションを。
冬の街から、温もりのある屋内へ。
食事や買い物、イベントを一通り楽しんで、暖まったらまた外へ。
雪を楽しみ、限界が来たら、次の場所。
そうして自然と、冬を楽しむ人たちが集まっていく。

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な
取組・手法

第4章

推進体制・支援策

(3) 住宅市街地の目指す姿

住宅市街地における目指す姿を設定するにあたり「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、住宅市街地エリアが果たす役割を整理します。



① 「住宅市街地」が果たす役割

住宅市街地は、札幌市民の暮らしの基盤であり、まち全体のウェルビーイングを支える最も広域かつ根幹的な空間です。「Well-Moving City SAPPORO」においては、誰もが安全に、自然と歩かせる「日常の風景」をつくることが目標です。

複合型高度利用市街地では、商業施設、駅へのアクセス性が高く、歩いて完結するライフスタイルを支える機能集積と空間整備が求められます。一般住宅地や郊外住宅地においては、安心して歩ける歩道整備、通学路の安全、コミュニティ空間としての公園や緑道の活用、冬の歩行環境対策が重要となります。

また、子ども・高齢者・障がいを持つ方など多様な市民が安心して出歩ける都市空間を整えることが、このエリアにおける最も重要な要素です。地域内での安全・安心な徒歩移動が可能になることで、生活の質の向上と地域社会の利便性向上を同時に図る役割を果たします。

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

取組・手法

第4章

推進体制・支援策

② 「住宅市街地」の目指す姿

自分らしく、気兼ねなく、出かけ愉しむ。
自然が彩る心地よい暮らし。



朝、カーテンを開けると、遠くに見える山の緑が萌えていた。
だから、今日はいつもの道を、徒歩で来たんだ。
すれ違う子どもたちの笑い声が、少しだけ大きく聞こえた。

【イメージパースの解説】※秋／昼間(休日)

- ・札幌の魅力である自然に気軽に触れながら、心地よく歩ける散歩道がある
- ・地域の歴史・景観資源を活かした歩きたくなる空間が形成されている
- ・誰もが安全に、自分らしく居られると感じる場所がある(身近な公園)
- ・モビリティハブがあり、気軽に交通にアクセスできるような環境が整っている

③ 子どもも親も安心して楽しく歩ける通学路の風景



子どもたちが毎日歩く通学路。
安心、安全はもとより、学校に行くため、
出かけることそれ自体が、楽しみとなる様々な仕掛け。
それは、子どもたちだけでなく、この街に住む誰もが、安心、安全に、
気兼ねなく出かけたくなる街の雰囲気を作っている。

④ 誰もが思い思いに過ごしている身近な公園の風景



誰もが自由に利用できる公園は、誰もが思い思いに過ごせる場所。
子どもたちの遊ぶ声。キッチンカーでランチ。
健康づくりの運動も。ひとりでも、みんなでも。
絶え間なく賑わう広場を見渡せば、誰もが充実した表情だ。

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

取組・手法
具体的な

第4章

推進体制・支援策



(1) 主要検討路線等の設定

都心のまちづくりの指針である「第3次都心まちづくり計画」において、都心のウォーカブル施策の推進にあたっての取組の方向等を示しています。また、面的な回遊を強化する「主要回遊エリア」、主要施設や魅力的な目的地、駅などを結び、回遊・滞在機能の強化に向けて検討を進める「主要検討路線」等を設定しています。



(2) 主要検討路線等における今後の検討の考え方

上記の主要検討路線等について、それぞれの通りに求められる機能や重要度等を踏まえて、市民や地域の関係者等と将来像を共有しながら、取組を検討・推進します。また、取組の検討にあたっては、以下の検討の方向を踏まえるとともに、回遊・滞在機能と交通機能のバランスに配慮し、相乗効果が発揮されるように考慮します。

凡例	主な検討の方向	(参考事例)
主要検討路線	●人中心の魅力的なストリートの実現に向けて、道路と沿道が一体となった空間形成を目指し、ハード・ソフトの両面から取組を推進	
	●四季を通じて安全・安心な歩行環境の充実を図るため、まちづくりの動向等を踏まえて、地上・地下の重層的な歩行者ネットワークを拡充	
	●歩行者・自転車の通行や沿道へのアクセス環境に配慮しつつ、既存の道路空間や沿道空間を有効活用	
拠点的交流空間検討箇所	●地域の活動や回遊を生み出す拠点として、骨格軸等の主要な通りの結節点において、公民が連携して魅力的な空間を創出	

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

取組・手法的な

第4章

推進体制・支援策



(1) 街歩きの面白さ

「この道は、なぜここで折れ曲がっているんだろう？」という幼い頃に抱いた疑問が原点となり、街歩き研究家として古地図を片手に札幌市内や道内各地を歩き回りながら、街の歴史や地理、そしてそこに眠る魅力的なストーリーを発掘して伝える活動をしています。ゆっくり歩くことで気づくことがたくさんあります。

例えば毎日当たり前のように見ていたはずの道路のズレが気になり、調べてみると初期のまちづくりの苦勞の跡だったりすることがあります。それを知ると日常の風景が別の意味を持ち豊かな表情を見せ始め、街がもっと好きになります。それが街歩きの面白さだと思うのです。



写真:狸小路5丁目のズレ



写真:碁盤の目同士の境で折れた道

(2) 歴史と文化を感じながら、街を歩くということ

碁盤の目の向き、道幅や地面の傾斜、建物、季節と自然、看板のデザイン、長く続いている店、地名など、目の前の街の風景だけを切り取ってもさまざまな要素があります。そこには今を生きる人々の息づかいが感じられるだけではなく、過去の人々の記憶が染み込んでいることで魅力が増しています。

再開発で誕生した新しい商業施設は美しく楽しいのですが、まだ出来立てで熟成していないウイスキーのようなもの。ここ最近、惜しまれつつ解体された商業施設は、ウイスキーが何十年もかけて熟成するように人々の記憶が積み重ねられたからこそ、深く愛される場所になったのではないのでしょうか。街を歩くことによって蓄積された歴史や文化を感じ、「この街が好きだ」と思える瞬間をもっと多くの方に楽しんでいただけたらと願っています。

(3) 「Well-Moving City」への提言

「Well-Moving City SAPPORO」には、交通の利便性を超えて、心が動き、感動をともにできる都市という願いが込められていると感じます。札幌は四季の移ろいや歴史的背景をもつ景観、そして多様な暮らしが同居する奥深い都市です。歩きながらその多面性に出会えることこそ、札幌の最大の魅力だと思います。

誰もが安心して歩くことができる環境があり、途中で立ち止まりたくなる風景があり、思い出に残る出会いがある。そんな街を目指していくためには、私たち一人ひとりが札幌の物語を楽しみ、語り継ぎ、共有しながら歩くこと。それが「Well-Moving」という言葉の本当の意味ではないでしょうか。



街歩き研究家 和田 哲(わだ・さとる)
広告代理店や地元情報誌編集者を経て2022年に独立。ブラサトルの愛称で、札幌の歴史を「広報さっぽろ」や雑誌の連載、講演、テレビ、ラジオ、YouTubeなどで発信中。

